
チビで悪いか！

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チビで悪いか！

【Nコード】

N7666D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

小柄な中学生の女の子咲菜。いつも上から頭をポンポンと叩く菊次郎にいつも怒り心頭だがその彼の本当の心は。中学生のラブコメです。

第一章

チビで悪いか！

和田咲菜は美人で名が通っている。彼女が通っている中学校ではそれこそ後輩達から慕われ他の学校の子からも注目されている。ちよつと繁華街を歩けばスカウトが来る程である。

黒いふわふわとした髪を肩が覆う程度の長さにしておりいつもにこにことした顔をしている。形のよい眉の下にはアメフトのボールの形をした目が垂れ気味にある。唇は鮮やかなピンク色であり白い肌と実によく合っている。一目で誰もが見る程の美人なのだ。ところがであった。

そんな彼女にもコンプレックスがあった。それは誰でもあるものだが彼女の場合は何かというところ。

背であった。何と小学生程度にしかないのだ。中学校三年だというのに一四五もないのだ。これで小柄でないとは誰にも言い繕えなかった。

「背位いいじゃない」

よくこうクラスメイトや同級生に慰められる。

「咲菜可愛いんだし」

「そうよ。小柄なのがかえって」

「私は違うのよ」

だが本人はそれにいつも反論するのだった。

「やっぱり。もっと」

「背が欲しいの？」

「ええ。小さいのは嫌なのよ」

そういうことであった。本人は我慢できないのだ。

「もっと大きくなって欲しいんだけれど」

「それは無理じゃないかしら」

「ねえ」

けれど彼女の願いはこう言われて否定されるのだった。

「もう成長期終わりがけだし」

「それにあんたのお家って」

ここで遺伝的な話が為されるのであった。

「お母さん小さいじゃない」

「それはそうだけれど」

「しかもお母さんあんたにそっくりだし」

実は母親似た咲菜であった。近所では評判の美人母娘である。それでまた有名にもなっているのである。並んで歩けば本当にそっくりなのだ。

「悪いけれどやっぱり」

「それ以上伸びないと思うわよ」

「ずっとこのままなの」

それを言われるといつも落ち込まざるを得なかった。

「小さいままで」

「だから。気にしない気にしない」

「それがどうしたのよ」

こう慰められるのもまた常だった。

「奇麗なんだし」

「自信を持ってね」

「自信を持っても伸びないじゃない」

まだ言う。どうしても諦められないのだ。

「あと十センチは欲しいんだけど」

「あと十センチねえ」

「望み過ぎかしら」

普通人間が十センチも伸びれば相当なものだ。例えばプロ野球選手や特撮俳優があと十センチも伸びればそれでも巨人になってしまう。何しろ一八〇超えている人間がざらの世界である。一八〇で低いとするのはそれこそアメリカのバスケットやアメフトといった特別な世界である。

「咲菜があと十センチ伸びたら」

「それでも一五五ないわよね」

やはり小柄だ。それは変わらない。

「それ考えたら望み過ぎじゃないけれど」

「むしろ。ささやかかしら」

「ささやかだったらやっぱり欲しいわ」

また言う咲菜であった。

「このままじゃ。またあいつに」

「あいつ！？ああ」

「あいつね」

皆そのあいつが誰かわかった。いつも彼女に対して何かとちょっかいを出すクラスメイトの三浦菊次郎である。彼女が一番嫌いな人間でもある。

「それこそ気にしなかったらいいじゃない」

「ねえ」

「じゃあ聞くけれど」

咲菜はむっとした顔でクラスメイト達に問うのであった。

「頭のとっぺん覗き込まれたことある？」

「それは」

「ないけれど」

見ればどのクラスメイト達も咲菜程低くはない。やはり中には小柄といっているいい女の子もいるがそれでも彼女よりはずっと背が高い。

「それで頭を上からポンポンと叩かれたことは？ボールみたいに」

「まあそれもね」

「ないけれど」

同じ答えが繰り返された。

「そういうことよ。わかるわよね」

「まあそういうことされたらね」

「流石にむかつくか」

彼女達も少しだが咲菜の気持ちが変わったのであった。

「だからよ。もっと背が欲しいのよ」

「もっとねえ」

「どうしたらいいかしら」

切実な話になっていた。

「運動しても牛乳飲んでも駄目だし」

「駄目なの」

「真っ先にしたわよ」

むっとした顔のまま皆に答える。

「それでも。駄目だったのよ」

「遺伝もあるしね」

「やっぱりそうなるのね」

「それで納得しないでよっ」

思わず皆に対して言った。

「こっちだって必死なんだから」

「それはわかってるわよ」

「ねえ」

顔を見合わせて咲菜言葉に頷いている。

「ただ。それはそれで受け入れるしかないんじゃないの？」

「やっぱり」

「諦めろってこと!？」

「簡単に言えば」

皆あっさりと言うがそれは咲菜本人にとってはあまりに受け入れ
難いことである。現にその言葉を聞いてその顔を余計に慚然とさせ
ていた。

「何よ。それじゃあ何にもならないじゃない」

「そりゃ男の子ならね」

クラスメイトの一人が言ってきた。

「かなり問題だろうけれど」

「女の子だったらそれはそれでいいじゃない」

「そうなるの？」

「もてるわよ」

こう言われたのだった。

「それはそれでね」

「そうなの？」

「小柄な女の子が好きな男の子だって多いわよ」

「結構多いわよね」

これは嗜好である。だから大柄な女の子が好きな男もいれば咲菜みたいに小柄な女の子が好きな男もいる。本当に人それぞれなのだ。

「だからそんなに気にすることはないんじゃない」

「極端にはね」

「極端に気にしているのよ」

クラスメイトの言葉を受けて述べる。

「私はね。あいつにいつもからかわれるし」

「ああ、三浦君ね」

「彼ね」

菊次郎である。いつも彼女をからかっている。

「もっと背が伸びればあいつにだってからかわれなくて済むし」

「あつ、多分それも無理」

「それも諦めて」

「諦めるの」

皆に言われてまた慥然となる。諦めるのは御免というのがはつきりと顔に出ていた。可愛い顔が不機嫌の色で塗りたくられていた。

第二章

「絶対に嫌っ」

「嫌ってねえ」

「そもそもあいつって」

「あいつが!？」

不意に皆の言葉の調子が変わったことに気付いたのであった。

「あいつがどうしたのよ」

「まあ注意して見ればいいわよ」

「そういうこと」

「!？ 話がよくわからないのだけれど」

今度は顔を顰めさせたのであった。

「何が何だか。注意してって」

「案外小柄なのも悪くないし」

「そうよね。それはそれでいいから」

またそちらに話をやるのであった。咲菜については余計にわからないことであつた。

「じっくりとね。見ているといいわ」

「じっくりとって。誰をよ」

「あんた……」

皆今の咲菜には呆れた顔になる。そうしてまた言うのであった。

「鈍かったの、ひよっとして」

「私が!？」

「ああ、もういいわ。それなら」

「彼も大変ね」

「彼がって誰よ」

またしても鈍さを発揮する咲菜であつた。その辺りは全く自覚がない。

「何が何だかわからないわよ」

「だから。じっくりと見なさい」

「それでわからなかったらどうしようもないけれど」

「わからないけれどわかったわ」

また慚然とした顔で答えるのだった。

「何を見るかもわからないけれどね」

「駄目だ、こりゃ」

「彼も大変ね」

「また彼なの」

何処までも話がわかっていない鈍い咲菜であった。しかし何はともあれその時からじっくりと周りを見てみることにした。それでも何もわからないが。

「何が何なのよ」

そう思っていた。

「大体彼だのって。誰のことなんだか」

「ああ、お早う」

「むっ」

ここで後ろから嫌な声を聞いた。声変わりして暫く経った男の子の声であった。

「今日も綺麗な頭の天辺だね」

そう言われながらその頭の天辺をぼんぼんと叩かれる。それを受けてからむっとした顔で上を見上げるとそこには一八〇を越えている背の高い少年がいた。背は高いがその顔が童顔なのが面白い対比を見せている。しかし彼の顔を見て咲菜はその顔をさらに不機嫌なものにさせるのであった。

「それがどうかしたのよ」

「いや、だから綺麗だって言ってるんだけれど」

「あんたに言われても嬉しくないわよ」

むっとした顔で相手のその童顔を見上げて言い返す。

「全く。いい！？三浦君」

彼がその三浦菊次郎なのだ。

「今度そんなことしたらただじゃおかないわよ」

「何かくれるの？」

「拳骨くれてあげるわ」

声を厳しいものにさせて告げる。

「わかったわね」

「あつ、プレゼントくれるんだ」

だが菊次郎は堪えない。平気な顔である。

「嬉しいよ。じゃあ」

「………本当にぶん殴るわよ」

堪えない菊次郎に対してまた言い返すのだった。それでも彼は平気であるが。

「全く。本当にいつもいつも」

「だって綺麗な頭の天辺なんだし」

「他はどうなのよ」

あまりにも頭の天辺のことを言われるのでそこを問うた。

「他？」

「そうよ。どうなのよ」

「まあそれはね」

ところがここで菊次郎は言葉を濁すのだった。

「何とも言うかね。まああれだよ」

「あれって!？」

今の彼の言葉に首を傾げる。だがそれでわかる筈もなかった。

「何なのよ、一体」

「まあまあ」

「まあまあじゃなくてね」

問い返すが菊次郎はこれに関しては全く答えなかった。

「何でもないよ。じゃあ僕はこれで」

「何処に行くのよ」

「何処って。学校だよ」

何を今更、といった感じの言葉であった。

「登校中じゃない」

「あつ、そうだったわ」

言われてそのことを思い出す咲菜だった。怒っているあまりそのことを頭の中から消してしまっていたのだ。目と口を大きく見開いて言う。

急いで学校に向かう。見ればその横には菊次郎がいる。その彼を横目で見ながら校門に向かう。横目でみ見る彼はどういうわけか笑っているように見えた。

そんな彼を見て何か妙な感じがしたがそれは言葉には出さなかった。その関係も相変わらずであった。

第三章

「何だよ、今日もかよ」

「今日もって何よ」

次の日は下校中に会った。どういうわけか毎日登下校のどちらからか両方で絶対に彼に会っているような気がする。それがまた彼女を不機嫌にさせるのであった。

「だからよ。小さいなって」

「小さくて悪いの!？」

「いや、別に」

意外にもそれは悪くないというのだ。

「そんなこと言ってる？俺が」

「言ってるわよ」

むっとした顔で彼に言い返した。

「毎日毎日。小さい小さいって」

「事実じゃないか」

彼は咲菜を見下ろして平然と言ってきた。

「小さいのはさ」

「だからそれよっ」

そこに突っ込みを入れる。

「毎日言って。気にしてるのよ」

「気にしたって仕方ないだろ」

菊次郎がまた言ってきた。

「小さいのはどうしようもないからな」

「どうしようもないって」

「小さいのはどうしようもないんだよ」

菊次郎は笑いながら咲菜に声をかけてきた。

「外見のことはな」

「どうしようもないって」

「それに」

「それに？」

ここで彼はさらに言うのだった。

「気にしても仕方ないしな。考えても」

「じゃあどうしろっていうのよ」

「受け入れるしかないじゃないか」

彼の言葉は平然としていた。

「俺だって背は高いんだし顔はいいし」

「顔はどうかしら」

あんまりにも彼が平気で自慢を続けるのでそこを指摘するのだった。

「あんまり自慢が過ぎると嫌味よ」

「本当のことを言っただけだけれどな」

「それが自慢なのよ」

また咲菜は突っ込みを入れた。

「本当のことって。自慢ばかりする男は嫌われるわよ」

「別に嫌われたっていいさ」

そう言われてもやはり平気な様子であった。

「幾らでも周りに嫌われても」

「嫌われても？」

「一人に好かれてたらいいさ」

これが彼の考えであるらしかった。何故かいつも話す時は咲菜に顔を向けて話すのだが何故かこの時は彼女に顔を向けず正面を見ているだけであった。

「それだけでな」

「いいの」

「そうだよ。だから気にしないんだよ」

さらに言葉を付け加えてきた。

「一人に嫌われてたら絶対に嫌だけれど」

「変なの」

咲菜はそれを聞いて首を傾げてから呟いた。

「普通皆に好かれないと思うのに」

「それはそうだけれどね」

これは菊次郎もそのようだった。やはり皆に好かれれば気持ちがいい。これは誰だってそうであるし菊次郎もそうであった。

「けれどそれよりも」

「その一人ってこと？」

「そうだよ。それだけでいいからさ」

「ふうん。まあそれならそれでいいんじゃない？」

咲菜はここまで聞いてこう述べるのだった。

「あんたがそれでいいのなら」

「ああ、そうさせてもらうよ」

「私としてはあれだけれど」

ここで菊次郎に対して注文した。

「背のことだけは言わないでね」

「さあ」

ところがこの質問にはとぼけてきたのだった。

「それはどうかな」

「そんなのだったらその一人にも嫌われるわよ」

「えっ!？」

そう咲菜に言われると何故か声を強張らせるのだった。

「そうなんだ」

「そうなんだって。何よ」

強張った声になった菊次郎に対して問うた。

「急に固まって。んっ!？」

「あっ、いや」

見れば菊次郎は強張ったままだ。咲菜はそんな彼を見ながら顔を顰めさせる。彼女は何故彼がそうなったのか不思議で仕方なかった。

「何でもないよ」

「何でもないの? 本当?」

「ああ、だから」

今度は声を震えさせていた。いつもの飄々とした様子が完全に消えていた。

第四章

「気にするなよ。頼むから」

「頼むから？」

「ああ、もういいから」

今度はたまりかねた様子になっていた。

「じゃあさ。僕は寄るところがあるし」

「寄るところ？何処よ」

これもまた咲菜にとってはわからない話だった。いつもは腹が立つ彼に対しても今日は違っていた。何でもわからずもやもやするのだった。

「わからないんだけど。さっぱり」

「まあこれでさ」

それでも何も言わずそそくさと前に出て咲菜から別れようとする。

「今日はこれでね」

「これで？」

「うん。それじゃあ」

「あつ、ちよつと」

菊次郎はそそくさと立ち去った。まるで逃げるように。咲菜はそんな彼を見て首を傾げるだけだった。何が何だかわからなかった。しかしこのことは翌日クラスメイト達に話した。すると彼女達は皆一斉に咲菜に対して怒りはじめたのであった。

「何よそれ」

「あんた馬鹿なの！？」

「ちよつと待ってよ」

いきなり馬鹿と言われて咲菜の方も不機嫌な顔になった。

怒る彼女だがそれでも皆の言葉は続く。

「鈍感だと思っていたけれどね」

「ここまでなんて」

「鈍感!？」

咲菜は話がさらにわからなくなった。眉も目も顰めさせる。

「私が!？」

「そうよ。そこまで言われて気付かないの?」

「皆もう気付いていたのに」

「気付いていたって」

皆の言葉が変わったことにここで気付いた。

「何によ」

「だからね。三浦君のことよ」

「こう言えばわかるかしら」

「わかる? その一人がどうたらってこと?」

皆怒った顔で咲菜に語っている。しかしそれでも当人は全く何もわかっていない顔でそこに困惑さえ浮かべていたのであった。

「本当に」

「いい!？」

「うん」

そのわかっていない顔で彼女達の話をもた聞く。

「つまりね」

「三浦君、あんたのことが好きなのよ」

「まさか」

それを聞いても全然相手にしない。一笑に伏しただけであった。

「有り得ないわよ。何であいつが私のことを」

「やっぱり全然わかってない」

「あんた、本当に鈍いのね」

「だから。何でそうなるのよ」

少し怒った顔になって皆に言い返す。

「あいつが私のこと好きだなんて。有り得ないじゃない」

「いや、有り得るし」

「考えてみて?」

また皆は咲菜に対して言うのだった。声が厳しいものになってい

る。

「何であんたにいつも声をかけてくるかわかる？」

「さあ」

やっぱりわかっていなかった。

「好きだからよ」

「ついでに言うわよ」

さらに突っ込んで咲菜に告げる。

「小さい小さいっていうのもね。あいつの愛情表現なのよ」

「まさか」

「だから。そのまさかよ」

「ほら、よくあるじゃない」

いい加減かなり呆れた顔になっているがそれでも説明を続ける。
色々と言っても彼女達もかなり咲菜と菊次郎に対して親身になっている。

「好きな娘程あれこれ構うって」

「それよ」

「そうだったの」

流石にそれは咲菜も知っている。それを聞いてようやく事態を把握したのであった。わかるとその顔が驚いたような困ったようなものになった。

「あいつ、それでいつも」

「それにね、そのあいつだけけれど」

「わかる？」

皆咲菜がようやくわかったのを見てやっとなのね、ととりあえずはほっとした。しかしそれでもまだ言葉を続けるのであった。

第五章

「小さい娘が好きなのよ」

「小柄な女の子がね」

「それが私ってことなの」

「そういうこと」

それをあらためて咲菜に言うのだった。

「だから。いつもあんたの側にいたのよ」

「からかいながらね」

「そうだったの」

それを聞くと驚いた顔でそのまま固まってしまっている。咄然として言葉を出すのも一苦労といった顔になってしまっていた。

「あいつ、私のことを」

「わかったら。いいわね」

「あんたがやることは」

くどいように咲菜に皆で告げる。

「さっさと動きなさい」

「折角なんだし」

「折角なの」

咲菜はそう言われて視線を上にした。そのうえで考える顔になった。

「何か。意外過ぎて」

「意外も何もあいつはあんたにベタ惚れなんだし」

「それともタイプじゃないの？」

「それは別に」

その言葉には首を横に振る。実は菊次郎みたいな顔はそれ程嫌いではない。性格が鬱陶しいと思っていたがそれでも真相を知れば次第にそれが可愛く思えてきてもいた。

「じゃあいいじゃない」

「わかった！？それじゃあやることは」

「ええ、わかったわ」

あらためて皆に対して頷いた。

「じゃあ今日。下校の時にね」

「そうよ」

「いい！？間違っても」

皆で念を押してきた。

「御免なさいとかお断りよなんて言葉はなしよ」

「そんなこと言ったら私達が許さないからね」

「何で私が言われるのよ」

そのことに理不尽だとも思った。しかし皆はまだ言うのだった。

「今まで全然気付かなかったからでしょ」

「向こうはあんたにぞっこんなのに」

「それならそうと言えばよかったのに、あいつも」

「いや、言ってるし」

「その前に態度でわかるわよ」

皆の突っ込みは実に容赦がない。

「全く」

「さあ、決めたらわかるわよね」

「ええ」

話は繰り返されているが咲菜は頷くのだった。

「こっちから言うわ。それでいいわね」

「そういうこと」

「じゃあ頑張りなさいよ」

それで話は一先終わった。それで下校時間。相手は向こうからやって来た。

「相変わらず小さいな、おい」

「今度からそれを言わなかったらいいわ」

頭をポンポンと叩く彼に対してまずは彼の方を振り向かず述べた。

「!?!? どういうこと?」

「だから。いいって言ってるのよ」

やはり彼の方を振り向かずに言う。

「わかったから。ここまで言えばわかるでしょ?」

「いいんだ」

菊次郎は咲菜のその言葉を聞いて動きを止めた。その表情は今の彼からはわからないが声はきよとしたものになっていた。

「嘘じゃないよね」

「嘘なんか言わないわよ。少なくともこうした場合ね」

「・・・・・・うん」

彼は咲菜のその言葉を受けて声で頷いた。

「わかったよ」

「全く。何で私なのよ」

ふう、と溜息をついてから正面を見たまま言うのだった。

「小さい娘が好きって。変わってるっていうか」

「悪い?」

普段の菊次郎に幾分かだけ戻った言葉になっていた。

「好みなんだしさ。それは」

「いいわ。それでもね」

それを受けたうえでまた言う咲菜だった。

「それでも?」

「さっきも言ったけれど小さいだの頭を叩くだの。そういったことはなしよ」

「わかったよ。それじゃあ」

「それでいいわ。それでも何かねえ」

咲菜はあらためて思うのだった。相変わらず前を見たまま。

「お決まりみたいな意外みたいな。終わってみると変な結末ね」

実は結末ではなくはじまりなのだが今の彼女はそう思うのだった。前に輝いている夕日が静かに二人を照らし淡い光で祝福していた。

チビで悪いか！

完

2008・2・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666d/>

チビで悪いか！

2010年10月8日15時07分発行